〔東京家政大学研究紀要　第33集 (1), p. 1〜18, 1993〕

語学将校　陸軍中佐　江本茂夫
－軍人として教師として－

河野　通

（平成4年10月1日受理）

Lieutenant Colonel Shigeo Emoto: Soldier and Teacher

Toru KONO

(Received October 1, 1992)

1．1　語学将校　江本茂夫中佐

私は中佐と一面識しかない．その日は，T教授の出版記念会兼病気全快祝が行われていた．如何にも軍人らしい恰幅の中佐は，丸刈頭に軍帽の跡を見せながら，「T先生，バンザーイ！」と叫んでいた．戦後の話である．背広姿の彼を「元中佐」と呼ぶのが正しいかも知れないが，今回は「中佐」と呼んでおこう．

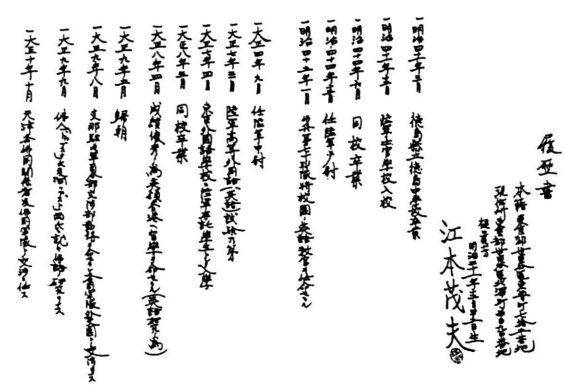
江本中佐は，若き中尉の頃，陸軍の派遣学生として，東京外国語学校（今の東京外国語大学）に学んだ．外国語学校での研修を終るや，今度は香港に出張を命ぜられた．「英語並ニ仏語ノ習得ニ任ズベシ」というのがその時の命令であったと聞く．生半可な勉強では，この命令に応えることはできない．中佐は一心不乱に勉強した．

一旦帰国した彼は，更に天津勤務等を経て，一時期，大阪の中外商業学校に軍事教官（当時は「配属将校」と呼ばれた）として勤務した．軍事教官の任務は，当然のことながら，生徒に軍隊式の訓練を施すことである．中佐は，この本務に，まことに忠実であった．彼の訓練は秋霜烈日，毫も仮借するところがなかった．当時，この学校は，生徒が乱暴であることを以て有名であった．今日流にいうならば，暴力教室乃至は暴力学校であろう．万一の場合に備えて，中佐は毎日下着を改めて出勤したという．

この軍事教官，放課後は英語の先生に早変りした．「商業を学ぶ者が英語を知らなくてどうするか．」既に，英仏語に堪能な中佐は，よき語学教師であった．生徒は軍事教官が英語を教えてくれることに驚いた．しかも，これまた寸毫も仮借なきドリルの連続であった．この学校の卒業生にして経済界に活躍し，英語を教えてくれた中佐を徳とする人々のことも伝えられた．

中佐が本務の軍事教練に甚だ熱心であった証拠に，中外商業は，後年その方面で，全国の模範校になった．

陸軍は，中佐を陸軍士官学校教官に任じ，将校生徒達に，英仏語を教えさせることにした．昭和初期のことである．いよいよ語学教育に専念する時が来た．江本教官は，軍人の卵に英仏語を特にそれを話すことを教えた．この時期に，前述のT教授と知り合って意気投合し，共に英語教育に尽力するに至る．T教授も，江本中佐と同様，英語教育上，その運用能力を重視した．T教授は筆者の恩師である．



しかし陸軍は，この語学将校をやがて予備役に編入した（任陸軍中佐）．江本教授は，時に平服で，時に肩に階級章のついた軍服にサーベルを吊って，横浜専門学校（今の神奈川大学）に通勤した．ある時台風がこの地方を襲った．川が溢れた．ふんどし姿に，軍服を丸めてそれにサーベルを通して肩に担いだ異様な姿の軍人は，横専の学生を見かけるや，英語で叱咤激励した．軍人の英語は弾丸の飛雨する中でもよく通らなければならぬ．中佐はそれを実践した．学生は勇気を振って登校した．風雨の町を行く人びとは驚いた．

大戦が起った．中佐は軍人に戻った．最初の任務は品川停車場司令官であった．品川駅から多くの兵士達が戦地に向って出発した．しかし，停車場司令官の仕事は，いわば閑職であった．中佐は，部下の幹部候補生出身の少中尉に，下士官兵の英語教育を命じた．テストだけは司令官自らが行った．下士官兵の成績は時として甚だ芳しくなかった．「君達の教え方がわるい．罰を与える．」しかし若い将校たちは喜んだ．罰は都内出張であり，出張先は日本劇場であり，任務はアメリカ映画を見ることであった．そのアメリカ映画も，ジェームズ・スチュアート主演「スミス都へ行く」を最後にはいって来なくなった．野球の「ストライク！」は「よし１本！」と改められた．アメリカは日本の敵であった．戦いは激化した．

陸軍は，中佐を函館の俘虜収容所長にした．勿論中佐の語学力（英仏にドイツ語が加わっていた）に期待してのことである．中佐は「捕虜の取扱いに関する条約」に基いて，捕虜を極めて公正に取り扱った．捕虜は所長の取扱いに満足し，感謝した．しかし陸軍省は，中佐に満足しなかった．江本は捕虜を優遇し過ぎる，敵のスパイではあるまいかなどと言う者も現われ，ついに中佐は，奥地の炭鉱労務者の監督に左遷された．その仕事には，軍人の資格も語学力も国際公法の知識も，全く不要であった．

戦争は日本の敗北に終わった．中佐の元の任地函館俘虜収容所の空気は険悪であった．昨日までの捕虜も，今日は戦勝国の軍人である．誰もが及び腰であった．時間が経過した．陸軍省は奥地の労務監督に，再び函館行きを命じた．

函館には，僅かながら雪が降っていた．捕虜将校は騒ぐ兵士達をなだめて，元所長の到着を待った．「エモトが来る．Commanderが帰って来る．話はそれからだ」．収容所の正面に３時間も立ちつくして中佐を待つ米軍少尉の略帽に雪が積った．Commander（Commandant）Emotoは帰って来た．そうして捕虜達の前に立った．早口の英語（machine-gun Englishといわれた）は捕虜達にとってなつかしいものであった．中佐は開戦前の世界情勢から説き起した．戦争の責任は日本にもあり，アメリカにもある．中佐は毅然としていた．中佐は捕虜にしばしの自重を求めた．中佐は捕虜の群に割ってはいった．身に寸鉄を帯びなかった．捕虜達は手を差し延べた．中佐はその手を握って廻った．収容所は平静に戻った．

その中佐を，占領軍は軍事法廷に引き出した．捕虜虐待容疑であった．中佐は法廷に立った．機関銃英語は火を噴いた．裁判長は，「あなたの英語は大変結構だが，もう少々ゆっくり願いたい」と言った．中佐は，容疑の一々について的確に説明した．結果は無罪放免であった．既にその時，占領軍司令官マッカーサー元帥の手許には，中佐の釈放を乞う手紙が届いていた．もとの捕虜達からのものであった．その数2,000通に及んだという．

かくて中佐は，巣鴨拘置所の生活を味った．ある日，米軍の憲兵司令官（Provost Marshal）が視察に来た．米側の職員と日本人戦犯容疑者が整列して出迎えた．戦勝国の憲兵司令官は先ず言った，「江本中佐はどこに居るか」．「私が江本です」．「やあ，エモト君！元気か」司令官は中佐をだきかかえて額にキスをした．「君はぼくを覚えていないのか．あの天津租界で，ほら，君は日本軍の連絡将校，ぼくは米軍連絡将校．よく飲んだじゃないか．ダンスもした．楽しかったなあ」．

戦犯容疑者の中に牟田口廉也氏がいた．陸軍士官学校では一期上であった．牟田口氏は，あの不幸な盧構橋の一発の時の連隊長であった．氏は，「私のはじめた戦争は私が終らせる」といって，インパール作戦を指揮した．結果は惨敗であった．陸軍は牟田口氏を中将に任じていた．語学将校は中佐にとどまった．将軍と中佐は，拘置所の庭を，連れ立って散歩した．将軍は死を覚悟していた．遺書を中佐に託した．しかし将軍もやがて出所し，インパール作戦の誤りでなかったことを説き続けて亡くなった．

戦後の中佐は，あまり外へ出なかった．しかし，その門を叩いて英語の個人教授を乞う者が絶えなかった．その中佐も故人である．亡くなって13年余りたつ．令息進氏は，言語学者・音声学者として活躍．英語力抜群は親譲り．国際会議に議長を勤めるなどして気を吐く．令嬢

は，ＮＨＫ海外放送の英語アナウンサー．これも親譲り．新幹線の中で聞く英語アナウンスは彼女の声である．
（東京水産大学「学園だより第26号」昭和55年）

1．2　承前

前章は，私が当時（昭和55年）勤務していた東京水産大学同年２月20日発行の「学園だより第26号」に載せた一文の再録である．このＰＲ誌の性質を考えて，これはかなり読み物的である．しかも一々出典を示す式のやり方をしていない．もとより，江本中佐については，軍人としても，また，英語教師としても，既に多くのことが語られている．この文で私は，読んだことや聞いたこと，それに多少の想像さえ交えて語っている．しかし，恩師Ｔ教授や，中佐の令息進氏らの証言と資料提供によって，これからは幾分でも新しい事実を語っておきたい．なお，もとの記事の中に明らかな事実誤認と思われる部分もあったので，その点は既に訂正しておいた．これからも，訂正しながら進んで行くが，あるいはまたしても読み物に終るかも知れない．

2．1　軍人江本茂夫の誕生

江本茂夫は，明治21年12月25日徳島県立江（現小松島市立江町）に生れ，明治41年，徳島県立徳島中学校を卒業，陸軍士官学校に入り[1]，44年同校卒業，陸軍少尉に任ぜられた．陸士24期生となったわけで，世はあと１年で明治を終り大正期を迎えようとしていた．西暦1911年，その３年後には第１次世界大戦が始まることになる．

なお，手元の履歴書（江本進提供）は，江本自筆のものであるが，昭和22年３月付のものであるから，江本は語学将校乃至は英語教師としての経歴に重点を置いている．歩兵科の若い将校としての成長ぶりについては，他に多くを求めなければならない．勿論，本稿も，語学将校乃至英語教師としての江本から学ぶことが主たる目的であるから，これはこれでいい．

任官ほやほやの江本少尉の任地は，篠山（ささやま，兵庫県）の歩兵第70連隊であった．70連隊は明治41年軍旗拝受，既に「山岳戦の篠山隊」として知られていたから江本の張り切りぶりが察せられるが，ここでは，銃剣術にそれを見よう．「篠山70連隊時代は『銃剣術の江本か，江本の銃剣術か』と称讃されその徹底的訓練と相待ってその名声大なるものがあった．其の訓練は猛烈を極め通常訓練以外に毎日５，６回も部下と木銃を握って居られ『からすの鳴かぬ日はあっても江本の白服を見ぬ日はない』と連隊全員の評判であった．昼の休憩時も他人が午前の猛訓練の疲を休めている間木銃を握り全身汗まみれになり冷水を浴びて午後の猛訓練に参加するという実に超人的の御努力をされた．」[2]　このあと，この道の天才丹羽哲助中尉と雌雄を決する大試合が伝えられている．

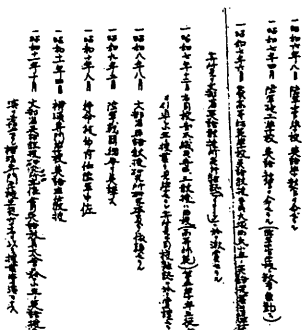
2．2　陸軍高等外国語試験（英語）に合格

江本少尉は多忙な軍務に加えて，敢闘精神の固りである「江本式銃剣術訓練法」，更に加えて，英語の勉強にも持ち前の不屈の精神を以て当り，大正７年３月，陸軍高等外国語試験（英語）に合格した．この試験の内容については明らかでないが，十分高度なものであり，江本は優秀な成績で合格したことであろう．合格の翌月には，東京外国語学校に派遣されているのを見ても明らかである．江本はこれよりさき，即ち少尉任官間もなく，70連隊の将校団に英語を教え始めている．このこと（「明45.１歩兵70連隊将校団ノ英語教官ヲ任命セラル」）は，士官学校在校中から既に頭角をあらわしていたことの証拠であろう．

3　語学将校への道－東京外語と香港

江本中尉が，陸軍委託学生として，東京外国語学校（現在の東京外国語大学）に入学したのは，大正７年４月のことであり，再び東京の生活が始るのだが，この間の勉強法がまことに江本流である．

江本は，学校で勉強するのは勿論のこと，朝から晩まで，自らを英語漬けにする努力をした．当時その名を「桜井ホテル」といって，主として外国人を宿泊させるホテルがあったというが，経営者は，自分の子弟の外国



語教育をも目的としていたようで，これは，贅沢な理想的外国語教育法かも知れぬ．江本委託学生はここに着目して，ほかの学生の多くが休養に費す時間を自らの英語の実地訓練にあてたわけで，江本の１日はAre you still in bed？という言葉から始ったと伝えられる．隣室の日本人中尉から，まだ寝ていますか，とやられた外国人宿泊客の顔が見たいものである[3]．

当時外語の英語科主任教授は村井知至であった．彼は江本学生を激賞して，「軍人の中は知りませんが，民間には江本氏より流暢に英語を話す人は見受けられぬ[4]」と言ったという．

休暇中は多くの学生は故郷に帰るが，江本は東京にとどまって，早朝から深夜まで，１日15時間もの間種々機会を作っては外国人と接して，英語力を錬磨したと伝えられる．

翌大正８年，村井主任教授の祝福を受けて東京外国語学校を卒業した江本は，香港に留学する．履歴書にいう「成績優秀ノ爲英領香港ヘ留学ヲ命セラル（英語研究ノ爲)」である．従って，今にして思えば§１．１に述べた「英語並ニ仏語ノ…」は，筆者が東京高等師範学校教授寺西武夫（§１にいうＴ教授）から聞いたことをもとに書いたことであるから，結果は正にそうなったとはいえ，訂正を要するものの如くであるが，次第に触れることとする．

江本は香港に１年間滞在する（大８．４－大９．５）．何故香港かといえば，当時まだ第１次世界大戦の余燼がくすぶっていたからである．ヴェルサイユ条約は，江本が命令を受領してから２ヶ月後（1919年６月）に締結される．

4　語学将校の誕生－天津勤務

香港から帰って３ヶ月，支那駐屯軍司令部交渉部（天津）に勤務を命ぜられるが，正に語学将校の誕生であり，本領発揮の場を得たわけである．30歳を過ぎたばかり，中尉の５年目である．任務の内容は，履歴書の内容にいう「各国軍隊外交団との交渉」であった．

江本のフランス語学習が，このとき（大正９年９月）に始るのだが，その上達ぶりはめざましい．フランス人２名（ドゥブスケ氏とロファスト氏）について勉強を始めて１年後には，天津在住のフランス関係の人々，特にフランス軍人との交渉に当るというスピードぶりである．筆者などは，天才江本！と叫んでシャッポを脱いでしまいたいところであるが，これも正に「江本一流の勤勉と職務励精のたまものであろう[5]．」江本はフランス語を学びながら，英語との類似を楽しんでいたふしもある．そうして，この時ものにしたフランス語を，のちに「アテネフランセ」でブラッシュアップし，昭和５年には，陸軍高等語学（佛語学）試験に合格する．

天津勤務中の江本の活躍ぶりを伝える逸話も数多い[6]．履歴書にいう「仏国軍隊トノ交渉」の中身は多彩である．

天津駐屯の仏国軍の主催で，日・英・米・仏４国軍隊の野外長距離駈足の競技が行われた．２番を除いて１番から６番までを日本兵が占め，２番のフランス兵は１番の日本兵に百米おくれて決勝点に入った．仏国少佐は江本に「１番の日本兵は約５メートルの近道をしたから，これを２等として２番の仏兵を１等にするのが至当である」と申し入れた．江本大尉（大正10．11任陸軍歩兵大尉）は「調査をするまで待て」と即答をさけた．コース上に配置した監視兵の調査の結果，前日の豪雨のためコース標識が不明の個所があり，日本兵は約５メートルの誤りをしたことがわかった．しかるに２着のフランス兵は約10米の近廻りを５回もしたことがわかった．江本大尉はこれを流暢な仏語で説明した．フランス側は会議を開いてあくまでも自国兵を１等にと主張したが，江本大尉は断乎として仏側の主張をしりぞけた．大尉は，「小官は従来フランス国及びフランス人に常に好意と尊敬を払ってきた．しかるに今日の競技に対する貴軍の態度は甚だ遺憾である．日本軍は今後仏軍の競技には参加しない」と言明し，日本軍隊に対し大声一番「集れ！」と号令した．

江本の「集れ」は，交渉打切り，日本軍退場の意味である．ここにおいて仏軍少佐も折れて一件落着するのだが，表彰式に於て，日本国旗のもと，先頭を行進する日本兵に対し仏軍々楽隊は日本国歌を奏してその栄を称えた．この日仏交渉をはらはらして見守っていた日本側将校たちに，江本は，「欧米人には生半可の妥協をしてはいけない．どこまでも正しいと信ずる主張を押し通さなければならない」と教えたというが，正に古今に通じる真理であろう．江本は軍人として，その心は偏狭に陥ることなく，異文化理解に先見の明を示し，すぐれた国際人であった．

天津在勤中の大正13年２月のある日，江本はフランス陸軍元帥ジョフルと日本軍司令官少将鈴木一馬との間の

通訳という大任を果している．

5　参謀本部英国班・陸軍高等語学試験（仏語）合格・結婚

3年余の天津勤務を終って，江本大尉は，帰朝して，参謀本部英国班勤務を命じられる（大12．2）．勤務の内容は「英語ノ応用勤務ヲナス」[7] とのみある．江本にとって，この英国班の勤務は，英語の応用勤務であったようだが，江本はその後，軍政軍令の枢要の道を歩くことはなかった．第1次世界大戦は終焉し，世は束の間の平和を楽しむ．しかし，日本は戦勝国の一員ながら戦後の経営に忙しい．やがて関東大地震が起る．参謀本部勤務の傍ら，アテネフランセに入学して，フランス語に磨きをかけるうち，年号も改って昭和となりその2年，江本は歩兵70連隊付として中外商業学校配属将校を命ぜられることになる．

これよりさき大正14年8月，37歳の陸軍歩兵大尉江本茂夫は津川とよ（東京都赤坂区青山南町）と結婚，新居を世田谷区代田橋に定めた．江本夫妻はその後3男2女をもうけた．夫人は92歳矍鑠として今金沢八景に在る．先年お目にかかったときには，「パーマーさんがはじめてお見えになったときには…」と，かのHarold E. Palmerと江本との出会いを追憶して楽しそうにお笑いになった．何でも，その時分の江本邸は2階を降りたところが玄関で，夏のある日，2階でパンツひとつで昼寝をしていた江本は，すばやくパーマーの前を通過して奥に消えたというが，わが国英語教育界における大きな名前の2人は肝胆相照らし，正にはだかのつきあい，江本の実践をパーマーの理論があと押ししたといえようか．江本は，新婚ほやほやの頃，とよ夫人に対して，「私は家庭においても英語をつかうが，協力してほしい．それがいやならば離婚も止むなし」と言ったという話[8]もあるが，この手の話はほかにもあるし，第一，矍鑠たるとよ夫人に確めればわかることだが，多分笑って答えられないであろう．とに角十分ありそうな話である．

夫人は，「主人のことはこれに出ています」と言って「日本人と外国語」（語学教育研究所編）を示されたが，それには西村稠著「世界の三大不思議」が収められていて「…去る1月29日惜しくも他界した江本少佐」をたたえていた．昭和41年，ご主人を失ったそのすぐあと出版されたこの本を大切に保存されていたようである．また田久保浩平著「これがＮＥＣの企業英語だ」をいただいた．

6．1　中外商業学校配属将校－軍人として

歩兵70連隊は，江本が9年前，任官最初に勤務して，銃剣術に出精したなつかしい連隊であるが，今回はこの連隊付として，実際の勤務地は，塚口（尼崎に近い）にある「中外商業学校」であった．中外商業学校は，「安田保善社」の経営する商業学校（旧制）であった．安田保善社は，安田財閥の事業経営の中軸である．しかし残念ながら，当時の中外商業についての一般の評判は芳しくなかった．江本は赴任してみて（赴任の前に付近の学校を訪れて中外商業の評判をきいている），全くその通り，素行不良の生徒が多いのに驚いた．江本は開口一番「諸君にして反省の実を挙ぐるに至るまで余は鬼と蛇の性質を以て諸君に対抗する」と言った[9]．このあたり，テープの中の江本の声は，snakeとかdevilとかしきりに言っている．

このsnakeにしてdevilの配属将校（陸軍現役将校学校配属令の公布は大正14年であるから，新制度間もない）の秋霜烈日の訓練の結果は，テープの声の如くThe worst school boys became the best in Japan only with the lapse of two or three years.で，大阪朝日が書きアクメ映画が撮り，この方面のモデルスクールとして喧伝された．映画が残っていたらさぞおもしろいであろうが，田久保浩平の詮索にもかかわらず見つからない．

安田保善社経営の中外商業の生徒の悉くが不良で乱暴者で学業不振の者であったはずがない．「従来は不良と目されていた生徒諸君が決して不良でなく，なまけ者でもなく，親泣かせの乱暴者でもなく，只ボンヤリと夢心地で学校へ通い，本性たる日本精神を忘れた状態にあっ

たに過ぎないと云うことを考えるべきではあるまいか，即ち彼等は本来健全にして優秀なる日本青年であったが，それが江本大尉の努力によって発見せられたものである．この事実，この江本大尉の貴い立証，発見を参考にせられたいと私は特に全国の教育家，指導者，長上たり，父母たる人々に進言するものである．」[9]

江本は，学校教練において成功したのみならず，この場合いわば余技であったはずの英語教育においても抜群の手腕を発揮するのである．学校教練に限ってみても，それは勿論江本の軍人としての識見と技量，また何よりも人柄と熱意によるものだが，教練そのものは，英語教育よりは幾分でも成果を得易いもののように，筆者には思える．

前述の如く，学校教練は大正14年の陸軍現役将校学校配属令を以て始るのだが，これは第１次世界大戦の国家総力戦的性格を教訓とするものではあるが，世には一方に軍縮の声も高く，現役将校の配属に対する反対もかなりあったようである．

ここで勝手ながら少々筆者自身の経験乃至は思い出を述べておきたい．筆者の年代は旧制中学校を経験している（昭和11～16）から，学校教練といい，配属将校といい，まことになつかしい言葉である．そうして，中学在校中に「学校教練必携」は「学校教練教科書」と改められ，学校教練の目的も「学徒ノ心身ヲ鍛練スルニアリ」から，生徒に野戦の小隊長たるの資質を得しめて「国防能力ノ増進」をはかるまで変化した．筆者の出身校である当時の東京府立第八中学校の初代Ｏ校長は理想家肌のひとでもともと教練嫌いであり，配属将校の某大尉（歩兵第３連隊付）を憤激させ，さらには時の３連隊長永田鉄山大佐をも激怒させるに至ったという歴史をもった学校だった．永田大佐を怒らせたのは筆者の入校前の話であるが，筆者が入校して３年生になるまではそのＯ校長がその任にあった．配属将校としてＳ少佐がいたが，厳しい中にもやさしさがあり，知性のひらめきを見せて，立派な軍人であった．しかし，生徒の目から見ても，教練の成績は振わなかった．それが筆者３年生のとき，新任のＮ校長とＩ中尉のコンビは，八中を青山師範と並んで東京地区における学校教練の模範校とした．Ｎ校長はいわゆる専検をとって高等師範学校に学んだ苦労人タイプのひと，Ｉ中尉は商業学校を出て入隊，甲種幹部候補生から現役将校の道を進んだこれも同様のタイプ，Ｏ校長とＳ少佐のコンビとは異って，ただむやみに実際的（と少年たちの目にはうつった）な人々で，よくもわるくも実際的教育を施した．しかし，このコンビは府立八中の学校教練の成績向上に成功した．上級学校（とは大学等のこと）進学率も上昇した．Ｉ中尉は大尉に昇進して，東京〔帝国〕大学の配属将校を拝命した．

これよりさき筆者が中学２年生のとき，盧構橋の一発を以て日華事変（当時は「支那事変」）が始っている．日本はこれから15年戦争を戦うのだが，配属将校（軍事教官）制度はこれに大いに寄与した．

さて，以上筆者の思い出話の中にある学校教練改革は，こちらはコップの中の嵐ではあるが，江本の改革と外側は似ている．短期間における変りようはそっくりである．しかし江本の場合は，時代がさかのぼるから，世間には一部逆風が吹いていたはずである．それを乗り切ったのは江本の至誠と熱意であろう．府立八中の場合は順風の中を行った，少しひねくれていえば迎合的といえなくもない．それにしても，江本はまことに異色の配属将校，その英語教育が大きくプラスされた点をこそわれわれは注目しなければならない．

6．2　中外商業学校配属将校－英語教師として

鬼にも蛇にもなろうという配属将校江本大尉は，放課後英語を教えたというが，こういうことは筆者など想像もできない．そうしてこれが成功して，この学校の学風を改めることに力があったのである．ある研究者は，「(江本は）そのうちに，軍事教練の傍ら，英語教育を手伝うようになったようである」[10] と淡々と述べるが，高梨健吉は，「配属将校が教練ばかりでなく，英語の猛訓練をしたというのは前代未聞の出来事であろう」[11] という．「…中外商業学校に配属将校として軍事教練を担当せられた頃，自ら進んで上級生の英語教授を引受けられて，氏自身の工夫になるディレクト・メソッド（直接法）に依って素晴らしい好成績を挙げたその経験から…」と寺西武夫は報じ，さらに「中外商業にいられた頃は，劣等生及上級学校志望者には，正課以外に毎日２，３時間課外教授を試み休憩中には希望者に対して毎日数時間欠かさず教えたそうである．この商業学校が一躍して軍事教練の模範学校となり，江本少佐在勤の頃は１ヶ年数千人の参観者があり，懼れ多くも侍従武官の御差遣があったとのこと，軍事教練の指導よろしきを得たことは勿論であろうが，一面に於て同氏が生徒に対して献身的に英語を教授したその熱が全校生徒を発奮せしめたのである

と，私は信じる．」[12]

以上の証言から，また前述の西村の証言[10]から，§1の駄文となったわけである．

7　陸軍士官学校英語学教官－寺西武夫と相識る

昭和5年8月任陸軍歩兵少佐，翌6年8月に陸軍士官学校教官を命じられる．当時はまだ歩兵少佐といったはずである．実はその前年発令予定のところ中外商業に留任運動が起って延びたという．生徒も留任を望み，理事者は陸軍当局に要望書を出す始末であったという[13]．配属将校の留任要望ということは，それこそ前代未聞かも知れない．また後年に至っては，留任要望などは考えられない話であったろう．

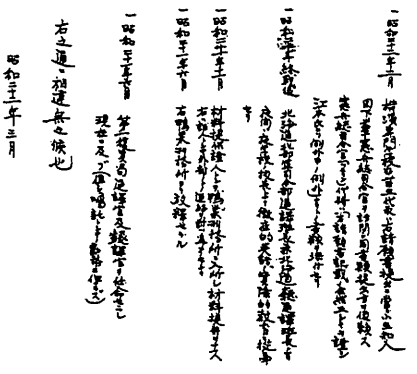
さて，§1ではおよそ無責任に，いよいよ語学教育に専念する時が来た云々，と書いたが，江本はもっともっと英語を教えたかったらしい．午前中は坐学（一般教育），午後は実科（専門教育）ときめられていて少しの余裕もない24時間教育の時間割の中へ割り込む隙はなかったであろう．辞令は「英語学教官」（兼砲工学校「英語教官」[14]）であるから，時には白服を着て木銃を握ったことがあったとしても，英語教室を開設することは不可能であったろう．

しかし江本が英語教師としての道に益々深く踏み込んで行く大きなきっかけとなったのは，正にこの時期である．昭和7年4月，即ち，陸士勤務1年，「東京高等師範学校英語教授寺西・大塚両氏小生ノ英語授業ヲ見学セラレ其所見ヲ文部省英語教授所発行雑誌「ブリティン」に於テ激賞セラル」．寺西教授に大塚高信教授が同行されているようだ．寺西・大塚の陸士訪問は6月30日で，「ブリティン」は，THE BULETTIN OF THE INSTITUTE FOR RESEARCH IN ENGLISH TEACHING, Department of Education, Tokyo, Japan（6月30日発行）で，寺西の「陸軍士官学校参観雑記」はそのp.10（邦文欄）にある．その一部はさきに中外商業に於ける江本の英語教育について述べるときに引いた．今ここでは，寺西の参観記の最初・中程・最後の部分から少しずつ紹介するだけとする．「去る6月14日陸軍士官学校へ同僚の大塚教授と一緒に英語の授業を観に行った．本科生28名．教官は江本少佐である．教科書は頭本氏編纂の時事文集．純然たるDirect Methodに依る教授法であった．先ず私達の心を打ったのは教官江本少佐の熱意である．英語の達者な事は申す迄もない．正味1時間1分1秒の弛みもなく，緊張に終始した快適な授業であった．」「吾々が吾々の運用し得る英語の嵩を増し得るに従って，Direct Methodを応用せんとして吾々の感じていた様な困難の多くは消滅するであろう．吾々は兎角吾々に爲し得ない事を，自己防衛の必要から，一足跳びに軽蔑しようとする傾向を吾々の内に感ずる事がある．是は慎しむべき事である．」「最後に，私は，江本少佐が，我英語教育研究所の会員の一人である事を，諸君と共に喜ぶものである．」[15]

江本と寺西の初対面は，これより少しさかのぼるが，寺西に従えば，それは昭和7年の1学期の半ば頃の話である．江本は東京高等師範学校を訪ね先ず石川林四郎教授と会い，その紹介で寺西と会う．そうして，「自分は長い間の体験からDirect Methodが最も効果ある教授法だと信じているのであるが，同僚達は皆Translation Methodで英語を教えている．自分は自分のやっている方法に自信を持っているが，専門家ではないので理論的なことはよく知らない，従って同僚達を納得させることが出来ない．こちらの学校では教授法を研究しておられ，Direct Methodを大に支持しておられると聞いたので御指導を仰ぎに来たのだ」と言う．「彼はどなたかの御授業を見せて頂きたいと申し出た．私はハッ！とした．」後日，「土曜日の2時間目が来」て，寺西は，国語漢文専攻の1年生の授業を見せる．テキストは“English As Speech Series”の中のひとつであった．これが初対面であり，以後変らぬ友情が続く．

その年の12月「右同校青木・織田・寺西3教授ハ同（原文「両」）校（高等師範）第3学年生徒全員ヲ引率シ小生ノ授業ヲ見学セラレ其所見ヲ同校雑誌ニ於テ賞讃セラル」．

沢正雄（昭和8年東高師卒）は，よく教生（教育実習



生）として陸士を訪問したとき（正にこのときであろう）の思い出を語るが，江本の挨拶 This is quite an unprecedented event that the student teachers of the English Department of Tokyo Higher Normal School eame to see our lessons here in the Military Academy today. It is a great honour and privilage to all of us.がマシンガンの如く口をついて出る．余程強烈な印象を得たものであろう．

8　大倉高等商業学校配属将校

江本は昭和８年歩兵１連隊付で大倉高等商業学校配属将校を命ぜられている．陸士や砲工学校の勤務は２年で終っているが，少々惜しい気もする．柏葉稔は幹部候補生出身将校として８年の間軍務に服したが，まだ兵の頃，横専時代の恩師と文通し，英語の返事を貰っていた．中隊長は「このS.Emotoというのは誰か」ときいた．「恩師であります」中隊長は「おれもこの先生に習ったよ」と感慨深そうであったという．陸士勤務２年の間の巡り合せであろう．

さて，陸軍の当事者が，既に中外商業で名を成している江本中佐を大倉高商に送ったのには，何か特別の意味があったのであろうか．同年10月には同校の創立記念日を祝っているが，その祝賀会の模様について久保義八郎の述べるところを，田久保が引いている．「講堂を埋むる幾千の学生生徒，其姿勢に態度に顔色に，厳粛犯すべからざるものあるを発見した大倉男爵とその一家の人々は聊か驚きの目を見張った．「今日は学生の態度が殊に立派に見える．」「校長室に引き上げた大倉男爵は感激の色を面上に輝かして校長先生の顔を見た．今日の盛儀，特に学生の態度が立派であったことについて謝意を述べた．之に対して校長先生は謙遜しながら其の礼はどうぞ江本少佐にといった．」12月１日には，大勢の陸軍将校が大倉高商を訪問したというが，これは時の第１旅団長永田鉄山少将が命じて，江本の訓練の成果を視察せしめたものという[16]．永田の江本に対する信頼の深さを示すものであろうか．永田は，一方において，片隅の出来事ながら，府立八中の如き教練不熱心の学校に激怒しているから，一方にはこのようにして，優良校を天下に示したかったのであろうか．以上は再び筆者の想像を交えたあるいはなくもがなの観察である．

大倉高商は現在の東京経済大学である．前出の大倉男爵とは創立者大倉喜一郎のことである．もう一度久保から引けば「大倉高商の学生生徒諸君はほとんど全部が東京生れ，東京育ちの人々である．智能もすぐれているがわるく云えばすれている人々である．少くとも種々なる悪思想にも最も多く接触し且つ感染している人々である．これを純朴な各府県の学生生徒諸君に比較すれば長所も有する代りに確かに，教化の困難な種類の人々を多く含んでいると見ることが出来ると思う，云々」[17]．このような見方も当時は確かにあったであろう．とまれ，明治33年以来の大倉商業，大正９年以来の大倉高商，昭和24年以来の東京経済大の長い輝かしい歴史の１駒であろうが，江本は学校教練において秋霜烈日の猛訓練を行う一方，この有名高商においても英語訓練を行ったであろうことは想像に難くないが，その点あまり伝えられていない．

江本の大倉高商配属将校は，昭和10年８月の予備役編入まで続いたはずである[18]．

9　文部省英語教授研究所研究委員－陸軍戦闘綱要の英訳－任陸軍中佐（待命）

文部省云々は，今なら「語研の研究員になった」といえば済むところであろう．１年前にthe Bulletinが激賞しているのだから，研究所関係者の悉くが賛成であったろう．寺西が強く推したであろうか．大倉高商配属将校の発令と同年同月のことである．

この頃，命によって「陸軍戦闘綱要」（のちの「作戦要務令」）の英訳を企て，昭和９年５月に完成発表した．柏葉稔は，江本に習った頃の教科書*Emoto's Vivid English*（昭和11年開拓社）を大切に保存しているが，その巻末付録に，戦闘綱要の日本文（原文）と併せて江本訳の英文を載せている．今も時折引用される部分「爲サザルト遲疑スルトハ指揮官ノ最モ戒ムヘキトコロトス是此両者ノ軍隊ヲ危殆ニ陥ラシムルコト其方法ヲ誤ルヨリモ更ニ甚シキモノノアレハナリ」を英訳で見れば，Every commander must carefully guard himself against falling a prey to inaction or hesitation, as to do so would put an army into a more dangerous situation than if an actual error had been made.となる．「戦闘綱要」は "Guiding Principles" となっている．

戦闘綱要という訳業を残して間もなく，昭和10年８月，陸軍中佐に任ぜられて待命となる．このあと７年間民間にあり，昭和16年，日米開戦と共に召集を受け，品川停

車場司令官を命ぜられるに及んで軍人として再びキャリアを重ねて行く．

9　横浜専門学校英語主任教授

自筆履歴書は，江本が待命を仰せ付けられたあと，全く職につかなかったのは7か月に過ぎないことを示している．すなわち，昭和11年4月，横浜専門学校主任教授に任ぜられるが，これから5年6ヶ月間に亘って，江本は現役将校としての身分を離れて，民間にあって江本式英語教育を進めて行く．英語教育家としての江本は40歳なかばを過ぎて，その英語には益々磨きがかかり，指導技術も向上して，横専生徒の信望を得て行ったことであろう．

横浜専門学校は，昭和3年の横浜学院に始り，翌4年横浜専門学校，昭和24年には神奈川大学となり，優秀教授陣を揃え施設を拡充し，発展を続けている．

田久保浩平は，昭和16年横浜専門学校入学以来江本に師事し，江本進に「ぼくよりもおやじと近い」と言わしめる高弟であるが，日本電気語学研修所長を経て，今や母校の教授陣に加わって，江本ゆずりの英語教育を実践している．

出来成訓は夙に英学史・英語教育史研究家として知られるが，これまた今や神奈川大学のスタッフの一員である．

柏葉稔は田久保の先輩，横専の高等商業科3年に進級した昭和12年に始めて江本の授業に出て感銘し，英語部にはいって特訓を受けた[19]．

以上3氏は，江本乃至は神奈川大学に直接関係のある方々である．

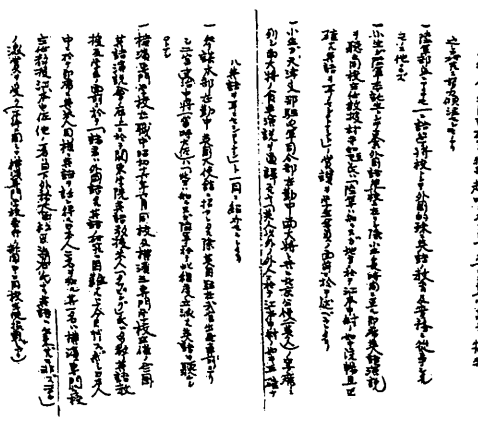
高梨健吉（日本英学史学会々長・日本英語教育史学会顧問）はその著「英語の先生，昔と今」の中で，江本に最多ページを割いている．

以下，江本自身の証言（履歴書・「各方面ヨリノ讃辞ニ関シ忌憚ナキ報告」）に上記諸氏の証言を併せて，江本主任教授の活躍振りを見よう．

先ず，江本自身による証言として上述の「讃辞」から引く．自昭和11年4月至昭和16年7月とあるから，辞任から応召するまでの期間中「横浜専門学校生徒ノ依頼ニヨリ毎日放課後約3時間半及毎春夏冬季休暇中毎朝8時ヨリ約6時間特別研究志願者1千名ニ対シ徹底的英語指導ヲナシ」た．「其結果右全員ハ相当ノ発表力及聴取力ヲ急速ニ確得シ其間約5，60名ハ英米両国生レニ非ラザルヤト当校来校ノ英米講演者ガ小生ニ質疑ヲ発セシ程度ニ上達進歩セリ」という[20]．在職5年少々で延べ1,000名に対する課外教育を行って好成績をあげたというわけである．英語の国に生れたかと疑わせる者数十名とは驚きである．

江本自らのいう休暇中の徹底的指導について，田久保から引く．「夏は吾等の希望の華であり生命の泉である．横浜専門学校入校以来4ヶ月江本教授の下にて徹底的の人格訓練を受け新たないぶきを感じた新入生は遠い懐しい故郷の夢も断乎しりぞけて夏季訓練を一日千秋の思いで待ち焦れるのである．早朝の江本教授の英語演説，語句の紹介，上級生を囲み今まで得た力量を以ての自由会話，英語即席演説又は吾等が楽しい英語散歩会，討論会等実に活発な，愉快な夏季休暇である．今までの経験に徴しても，休暇前百点中，5点，10点を取っていた劣等生が徹底的夏季訓練の後，一躍80点，90点をとるという驚異的進歩を遂げ全く別人の感を懐かせるに至ったものである．」[21]

柏葉稔は50数年前を振り返って，夏季課外授業の効果を今も称讃する．なお，普段の授業については，次のように証言している．即ち，「先生が現われると教室内に緊張感がみなぎりクラス委員が「スタンダップ」と号令をかける．「バウ」，「アズ・ユー・ワー」，「シット・ダウン」の声で席につくのであるが，動作が揃わないと直ちにやり直しを命じられた．また授業中に私語を交わしたり，態度の悪い生徒に対しては起立させて厳しく注意されたが説教も全て英語であった．テキストは先生が作られた「エモトーズ・ヴィヴィッド・イングリッシュ」であったがあまり使用されず，たいていは「ジャパン・タイムズ」や他の英字紙の時事問題をテーマに，英語のスピーチを行い，その内容について生徒に次々英語で話



させるやり方で，日本語は一切使われず，『ヒヤリング・パワー』『プロダクティブ・パワー』と『スピーキング・パワー』の習練に重点が置かれたユニークな「ダイレクト・メソッド」でいわば先生自身がテキストであった．いままで英文学の講読，英作文演習，外国人教師の英会話などを受けていたが江本先生の「オフハンド・スピーチ」を主体とする英語教授法には初めは大いにとまどったものであった．[22]」

以上述べたところは，稲村松雄の証言（出来の研究にくわしい）もあり，前述のThe Bulletin.にもくわしい．出来成訓も「日本英語教育史研究第6号」に「横浜専門学校の英語教育」と題して発表するうち「横浜専門学校での立役者は江本茂夫であった．彼にとっての幸運は学校の－もっとはっきり言えば創立者でもあったワンマン校長の－全面的支持を得ていたことである」[23] ワンマン校長米田吉盛については出来の研究にくわしい．また米田は，筆者の恩師である青木常雄を講師として採用しているが，青木を遇するに厚く，青木は「死ぬまで教えに行きます」と，その厚遇に感激して，筆者に語ったものである．米田は，青木の心をつかんだ如く，江本の心をもつかみ，江本は米田のバックアップのもと，志を延べたのである．青木は，教育大学を退くや，自宅から歩いて通える距離にある東洋女子短期大学に勤め，80有余歳まで教壇を降りなかった．筆者ら教生を連れて江北中学校（当時）に行き，授業見学のあと，“Gentlemen！”と英語で教生に訓辞をした青木教授を思い出す．時代が少々ずれていて，神奈川大学が都内にでもあったら，江本と青木はコンビを組んで…と想像は楽しい．双方劣らぬ英語使いの頑固おやじであった．

高梨健吉は筆者より大分先輩である．昭和14年に江本の模範授業を見ている．高梨は「今もはっきり記憶に残っているのは，If I remember rightly（記憶にまちがいなければ）という語句を生徒に覚えさせると，次に生徒が一人ひとり立ち上り，その語句を使って短文を即席に作って言うのである．これなら語句を完全にマスターでき，しかも発表能力を鍛えることができるのだと感心した．」と述べ，江本のマシンガンに感服している[24]．

10．1　再び軍人江本へ－品川停車場司令官

昭和16年7月までは横専の教授であったが，その年のうちに応召，品川停車場司令官を命じられたようである．自筆履歴書はそのことを語っていない．筆者は17年4月から寺西武夫の授業を受けたが，寺西の授業も厳格，Close your booksという命令のあとは英問英答休む暇なく，級友の多くは，勿論筆者など最たるものだが，机の下で時計を見てはらはらしていたものだ．江本と違うところは，時として全然英語の授業をせず，戦局の帰趨を説き，あるいは人生を説いた．寺西はある時，苦悩に満ちた顔で戦局を説き，自分は昨夜考えぬいて必勝の信念を持ち得たが，それはあくまで精神的な問題である，経済力特に兵器の生産能力については自分は十分知らぬ，これから考えるのだという意味のことを言った．ある日授業の前の「気ヲツケ！　礼！」のあと，級長は「着席！」をかけずそのまま「令兄寺西中佐ノ霊ニ黙祷！」とやっておくやみ申し上げた．令兄は航空兵であったかと思うが，あの戦いの2年目には既に戦死されたのであった．さてある日「江本さんの話をしよう」と，上機嫌の寺西は始めて，畏友江本中佐は今品川の停車場司令官であると言い，筆者が§1に述べたようなことを話してくれた．俄か教師をやらされた幹部候補生出身の将校達も驚いたことであろう．私は当時大井町に住み，通学の途中，品川駅を通った．「停車場司令部」という大きな貼紙を見たが，寺西の話だけで一面識もない司令官を訪ねるなど到底できなかった．私事のついでに，「よし1本！」についていうと，それは筆者の亡父の仕事であった．当時プロ野球の仕事をしていた亡父安通志は，「ストライク！」を主張したが容れらず，不本意ながら，「よし1本！」に従って審判員を指導した．審判員の指導も父の仕事のうちだったらしい．閑話休題．一部寺西の話をもとにして停車場司令官を閑職といったが，これにも大分想像を交えている．何十年もたって，筆者は東京水産大学に勤務し，品川駅で乗り降りするようになった．歓呼の声に旗の波，列車に満載の兵士たち，司令部の標識，憲兵腕章に太いサーベル，それらが時折平和な雑踏の中を歩く筆者の瞼の裏に現れた．

10．2　北海道函館俘虜収容所長

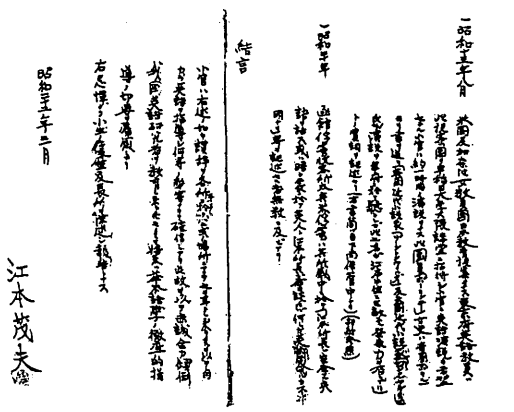
自筆履歴書によると「昭和19年3月　北海道函館俘虜収容所長ヲ命セラル小生ハ国際正義ニ準據シ彼等俘虜ヲ正遇シ全俘虜ハ百パーセントノ改善アリタリトテ感激シ同年9月同収容所視察ノ米英利益代表『スウィス』人『ベルナット』氏ハ日本全国第一流ノ収容所ナリト激賞セリ」となるが，俘虜収容所長のポストは江本自身の希

望するところであったとも伝えられる．江本は日本側の俘虜の扱いがわるいということを耳にして胸を痛めていたらしいのである．当時，敵愾心の高揚と称して俘虜の如きは虐待すべしと言わんばかりの言をなす者が軍官民指導者の中にあったことは，筆者も記憶する．大本営陸軍部の秋山参謀は，ラジオで「おかわいそうに」と題して講演した[25]．そのあと筆者は連合軍捕虜を運ぶトラックに小石をぶつける小学生の一群を見た．オズワルド・ワインド氏の一文中に「…平手（中尉．連合軍により処刑されたが，明らかに無実であった）は法廷で，「捕虜に関する国際法（ジュネーブ条約）の存在は耳にしていたが，その条約に従うように特別の訓練も指示も受けなかったと証言しているが，収容所関係者には『捕虜に関する国際法』は知らされておらず，『生きて虜囚の辱めを受けず』といった戦陣訓の言葉や東条英機首相の『（捕虜は）人道に反しない限り，厳重に取締り，その労力特技を我が生産拡充に活用せよ』という訓示をうのみにして『連合軍』捕虜を遇することもあった」という[26]．この事態を「語学に堪能で世界に通じていた江本」は大いに憂えていたであろう[27]．

江本は函館に赴任した．函館俘虜収容所は昭和17年12月開設，江本は2代目の所長であった．初代所長の畠山大佐の収容所の運営は当を得たものでなく，上記の東条訓示にいう「人道に反しない限り」という条件にさえ反するもので，その在任中1,400名弱の俘虜中238名の死亡者を見た．但し，この数字は連合軍最高司令部法務部の発表に基くものである．同発表に従えば，第2代所長として江本がその任にあった14ヶ月の間には，俘虜の死亡者は3名といい，しかもそれは自然の命数であったという[28]．

江本の俘虜の扱いが当を得たことは，上記の数字が端的に示す他，多くの人々によって語りつがれているが，以下に引く英文書簡一通はそのオリジナルのひとつであろう．証言の主はマーチン・リットン・ワッサーマンという元米軍兵士である．階級は伍長であり，インタービューに応じたのは昭和21年2月のことで，記憶も鮮烈の頃であろう．暫く原文から英語のまま引く．

…Lt. Colonel Emoto (first name unknown) was a Japanese officer in charge of all regular prisoners of war camps on Hokkaido Island, Japan, at the time informant arrived as a prisoner of war at Hakodate Prison Camp No.1 on approximately 27 March 1944,… Lt. Colonel Emoto remained in this position until approximately 5 June 1945, which is the approximate date on which the camp was moved to Bibia (ママ) (phonetic), 100 miles north. During this time Lt. Colonel Emoto used Hakodate Prison Camp No.1 as his headquarters camp and spent considerable time there. He served this camp as commanding officer in addition to his all-over adminstrative duties. The informant was thus in a position to see him often and on numerous occasions talked to him face to face.… Emoto made a sincere effort to understand the point of view of the America prisoners of war and was very just, impartial and humane. He was inclined to give the prisoner of war the benefit of any doubt when it came to judging a situation. He listened attentively to the complaints of prisoners of war and did his best to correct the conditions which caused them. Emoto made sure that when any of the Red Cross supplies and equipment came under his authority they were not diverted to the Japanese but went to the American prisoners. There were no tortures or beatings at the camp while the informant was there, although it was reported to him that such punishments had frequently been inflicted before Emoto took over command, in approximately January 1944. As a matter of fact, informant said Emoto treated the prisoners so well that in a



number of cases he is believed to have been reported by his own suboridinates as being proally. Emoto himself in a talk to the prisoners of the camp, appealed to them "not to use his name in vain" in trying to get out of work details or get special consideration from the guards, because of the danger to him of these same reports. He himself said such reports had been turned in.

Emoto speaks perfect English and showed considerable interest in talking to the prisoners and finding out about the American mode of living. The informant believes that Emoto was an English professor in a Japanese university before the war and early in the war instructed Japanese Army cadets in English at the Japanese "West Point", later becoming a railroad transportation officer. He had never been in active Army service outside Japan, the informant believes.[29]

以上の内容は正に捕虜の一人からの生々しい証言である．収容所長以前の江本の経歴についても誤りなく伝えているが，江本と2人きりで話をしたこともあって親しくしていたのであろう．ファーストネーム・アンノウンは，敵ながら中佐の階級章をつけた所長は常にLt. Colonel Emotoであったからであろう．中佐はjustでimpartialでしかもhumane，それだけで十分であろう．とに角，収容所の外には敵愾心高揚の世論が吹き荒れ，しかも次第に日本人の食糧も欠亡して，国際赤十字社から捕虜宛の物資が届いても一部横取りすることにうしろめたさを感じるどころか，これも戦いの延長として正当化さえしようとしたであろう．筆者，例の如く私事を交えれば，兵として近衛輜重兵第2連隊にあった頃，この「特訓兵」（体の弱い兵，あまり自慢にはならないが）宛のたまごも肝油も，配給されたのは初めのうちだけで，のちに杉並の分屯地へ行ってからは一切届かなかった．あの頃は世をあげて横流しの時代で一部の軍隊はその典型で，俘虜収容所もその一部で，江本が当然と信じるところを行っても，捕虜なんかに，の一言に踏みつぶされそうになったであろう．また，わけもなくブットバスのは日本軍隊のならいであった．わけのわからない私的制裁は日常茶飯であった．日本軍隊には，江本の例に見るような秋霜烈日の訓練とは全く無縁の，上級者の下級者に対する暴力があった．捕虜に対しては時に初年兵以下の扱いがなされたであろうことは想像に難くない．

江本が捕虜を正当に扱っても，今度の所長はおかしいとか，甚しきは，敵のスパイではあるまいかという蔭口が，金網の外からも内からもささやかれたのである．

上記伍長の証言に，江本はアメリカ人の生活様式に興味をもったとあるが，江本進は言う，「…父はこんな話もしてました．――日本軍の担当者が遠くにいる捕虜を呼ぶとき『コイ，コイ』と手招きして呼ぶのだがなかなか来ない．そこで，声もジェスチャーも大きくしてもう一度呼ぶと，捕虜はそのまましゃがみ込んでしまう．そうすると，担当者は自分の命令を拒否したと思って，ビンタを食らわすなり体罰を与えてしまうのだが，本当は違う．日本では，人を呼ぶときの手招きは手を上から下へと振りおろすことになっているが，あちらではそれは，とまれのジェスチャーなんだ．お互いにその違いにきづかないから暴力を振った振わないの話になってしまう．困ったことだ ――と．」

江本は収容所内で，英和辞書作りを企てている．江本はオズワルド・ワインドと協力して，毎日2時間をその企てにあてたが，やがて昭和20年5月，江本が収容所長を免ぜられるに及んでそれも中止された．

江本の収容所長は1年2ヶ月で終った．全国の俘虜収容所管理の責任者であった田村宏少将は，江本の任を解いた．函館の収容所では再び劣悪な待遇が始った．殴打禁止の貼り紙は破り棄てられた．

11　美唄炭鉱の労務監督

江本は美唄で炭鉱労務者の監督として勤務したが，この間も身分は応召中であったろう，「…江本は退官し函館俘虜収容所を去っていき…」とはオズワルドの伝えるところであるけれども．自筆履歴書は昭和19年3月の函館俘虜収容所の発令から，昭和21年11月の「スターズ・アンド・ストライプス」紙の件に飛ぶ．俘虜の扱いについてこそ一家言を有し，それを実行して，これは他人にはできまいと誇ったことが容れられず，この炭鉱の労務監督に左遷されて不本意な勤務の毎日，この時の江本の胸中は察するに余りがある．内容上重複を顧みず，ヘッセル・ティルトマン（当時ロンドン・デリー・ヘラルド極東主任特派員）から一部引いておく．「…江本の収容所にスパイが送られた．江本が実施した正しい待遇に関

するスパイ共の報告の結果，江本は1945年（昭和20年）４月の末に職を追われると北海道の炭鉱で朝鮮人労働者を監督する地位におとされた．」このことは，江本の収容所内の改善が北部軍司令部にわかってもらえないので，報告をやめてしまったことの結果のようでもある．柏葉によれば，戦後元北部軍の高級参謀に会ってきいたところ，江本のお蔭で自分の部下から戦争犯罪者を出さなくて済んだ，江本に感謝する，と言ったという．

筆者は昭和20年５月から陸軍二等兵を勤めるのだが，ある時内務班に新聞があった．兵隊ばかりの内務班に新聞があったのは不思議であるが，われわれの分屯地が杉並の妙法寺（通称「お祖師さま」）というお寺であって，営門歩哨の立つ兵営ではなかったからであろう．その新聞に文部辞令が出ていて，依頼免本官　東京高等師範学校教授　寺西武夫，とあった．江本が得意の英独仏語に国際感覚という武器を奪われて悶々の日々を送るとき，寺西は信州上田のある国策会社に勤め，勤労課長の職にあった（あとで聞いた話）．最早学校もかたちだけのものであり，学生は通年勤労動員で下宿から割当て先の工場へ通うだけであったから，寺西のdirect methodの出番もなかった．学生は私のように入隊命令を受ければ，その工場からも消えていった．必勝の信念の固い寺西は勤労動員された学生の監督の地位に甘んずるよりも，戦う祖国の生産力増強に積極的に参加しようとしたのであろう．「よし１本！」の亡父はプロ野球チームを解散した．

12　戦争終結と函館俘虜収容所

昭和20年８月15日正午，日本国民は昭和16年12月８日以来の大戦争が終ったことを知らされた．世の中がひっくり返った．函館俘虜収容所では，一部の捕虜があばれたりまた食糧を奪うなど，険悪な状況となり，もはやこれをおさめることのできるのは，江本を措いてなかった．当局は江本に函館行きを命じた．江本の到着がおくれたのは，当時の交通事情，特にまともに動く乗用車が少なかったこともあり，また江本がビールを買い込んで車に積むなど，今は戦勝国の軍人である捕虜をなだめるために気を遣っていたことにもよる．

江本は収容所に着いた．調達のビールも役立った．Bottoms up！君たちの勝ちだったな．そうして，何よりも，外国語の実力と国際感覚，それに３ヶ月前までの人道的扱いは捕虜たちの身にしみていた．

筆者の耳にラジオから流れるPlease stay where you are！が今も残る．方々にある俘虜収容所にいたPOW'sに呼びかけていたものであろう．

立場は逆転して，軍人軍属として俘虜収容所に勤務した日本人のうちから軍事法廷に引き出されるもの多く，これもBC級戦犯と呼ばれた．

13　占領下の日本と江本通訳班長

江本の俘虜取扱いが国際正義に従ったものであることを，英米利益代表が激賞したのが昭和19年３月であったから，自筆履歴書はこの頃を以て戦時が終り，戦後となる．

函館俘虜収容所も，江本のお蔭で平静に戻ったあとは，多分順調に事は運んだことであろう．勿論今までとは逆の不公正も方々にあったに違いないが，とにかく，西欧の常識においては名誉ある存在である捕虜達は解放された．わが江本は北部軍司令部通訳班長兼北海道廳通訳班長として勤務した．その勤務のかたわら，夜学校の校長となって「徹底的英語ノ実際的教育ニ従事」した．そろそろ60歳に近い元中佐は，多分階級章を外した軍服に身を包み，背すじを伸して，元気に昼夜勤務したことであろう．しかし，長くは続かなかった．

14　戦犯裁判と江本証人－得意の英語

昭和20年11月の頃には「材料提供証人トシテ巣鴨刑務所ニ入所シ材料提供ヲナス右ハ証人トシテ外部トノ連絡ヲ断ツ爲メノモノナリ」とある（自筆履歴書）．入所７ヶ月ののち，翌21年６月釈放され出所している．

筆者も簡単に「捕虜虐待容疑であった」と書いた（§１）けれども，詳しくは，あるいは正しくは，材料提供証人として，暫く外部と連絡できないように，拘置所に置かれたのである．このあたり，ティルトマンも簡単に次のように言う．即ちWhen the war ended, Emoto——along with all other officers who had charge of POW camps—was arrested by the Americans and lodged in Tokyo's Sugamo Prison for investigation.

しかし同じティルトマンに続けて証言してもらうと次のようになる．即ち（日本週報に載った日本語訳による），「…江本はこれまで数回，横浜の俘虜虐待裁判に，証言するため検察，弁護の双方から呼び出されている．」

西村稠によれば，「彼は戦犯容疑で起訴されたが，横

浜にできた軍事法廷に，弁護士も連れず単身出かけて行って，起訴の各条項について，一々明白に答弁をしたために，無罪放免になって即日帰されたという．」となる．筆者の如きもこれに基いて§1に書いたのだが，如何にも機関銃英語の出番は劇的であるが，実際には裁判記録も見てはっきりとさせなくてはなるまい．要は収容所の設備や運営について証言し，日本人関係者の虐待容疑があれば証言しなどしたのであろう．

戦争裁判の結果処刑されて命を失った日本人は1,068名に及ぶそうであるが，なかには前出の平手中尉の如き無実の例もある．それこそ異文化理解の未熟もあり，戦闘中かそれとも戦闘後の出来事か判然とせぬまま推移した例もあろう．証人が真実を語らなかった例もあろう．責任上罪を一身にかぶった潔い「武人」もあったろう．敗戦，国が主権を失うことのおそろしさ，「私は貝になりたい」の頃の話である．こうして勝者によって敗者は裁れた．これに深入りするのは本稿の目的ではないこと無論であるが，何分不明の点が多過ぎる．

15　釈放－第一復員局通訳官兼翻訳官

巣鴨の生活は7ヶ月続いて昭21年6月出所，すぐ，第一復員局の通訳翻訳官に任用されている．第一復員局とは旧陸軍のことである．田久保は，23年に軍隊から帰ってすぐ江本を訪ねた．「復員と同時に江本先生をたずねた．戦後，軍人に対する風当りはつめたく，戦前あれほど英語教育界に貢献された江本先生の生活もひどかった．先生は復員者の家族寮におられたが，それでも一室を白布で仕切って応接室を作り，昔の生徒をむかえてくれた．」江本の履歴書にいう「但シ嘱託トシテノ勤務ニ他ナラズ」ではあるが，一先ず職と住居を得た．ここで履歴書の記事は終り，あとは「各方面ヨリノ讃辞ニ関シ忌憚ナキ報告」となる．

16　英語教室・個人教授

江本は，教え子の厚意で市ヶ谷にある成城高校の教室をかりて英語教室を開いた．田久保も参加した．筆者は，つい先頃まで，年に2回成城高校に出張して，英語検定の面接委員を勤めた．勿論今は新しい校舎が建っている．田久保のアルバムの中の写真にあるのは木造の旧校舎である．しかし，ここで江本が教えたと思うと，また江本が近づいたような気がする．さきに品川駅頭に立つ軍人江本を想像したが，今度はまちの英語教師江本が毎晩通って来る熱心な生徒を相手に，一分の隙もなく厳格に教える姿を想像する．

江本進も田久保もこの教室の生徒になった．江本先生は，出席をとりながら「次はムラクモ君．ツキニムラクモハナニカゼ．英語で言ってご覧」とやっていた．生徒がためらっていると先生が模範を示した．諺などが得意の江本は「『二階から目薬』か．それはfanning the sunだ．That's just fanning the sun with a peacock's feather.」江本の諺は，時に斎藤秀三郎あり時にシェークスピアありで，生徒を喜ばせた．厳格な江本は一面ユーモア感覚にあふれていた．

ある晩のこと，突然アメリカ兵2名が教室へはいって来た．江本は授業を中止した．「何の用か」「この教室では占領軍の政策を批判しているという住民からの訴えがあったのだ」生徒たちは固唾をのんだ．連合軍はこの国の主人であった．元陸軍中佐にして函館俘虜収容所長，軍事法廷の証人の経験もある江本に，若いGIは歯が立たなかった．日本の政治，日本の社会，日本の家族，それに日本の天皇も…．アメリカと日本はかく違う．われわれが仲よくして行くためには相互理解が必要だ．相互理解，そうだ，相互理解があったら，不幸な戦争は起らなかったろう．そのために努力しよう．わたしも微力を尽している．君たち，わかったかね．わかったらボスのところへ帰り給え．さよなら．」江本進によると，bossのところへと言わずGo back to your father！と言ったという．これがイギリス式なのかも知れぬ．英語教室は数々あったろうが，成城高校教室の教師は並みの教師ではなかった．江本のバックボーンとそれを伝えるマシンガン英語，これも爽快な話ではないか．

ある銀行の女子職員数名が語らって英語勉強会を作り，江本を講師に招いた．江本は快諾した．勉強会は勿論，行きも帰りも電車の中もすべて英語であった．その中身は，主としてこのいわゆる新生日本における家庭の，家庭婦人の役割といったものであった．なかの一人は，何十年もたった今も，その教訓を噛みしめている．この話は柏葉による．

毎年1月から3月までは，東京高師の教育実習期間であった．昭和22年，筆者は実習生であった．担当の付属中学校の生徒のひとりが，「夜学で英語を勉強しています，先生は江本先生です．先生はあまりalwaysと言わずにall the timeとおっしゃいますが，アメリカ式でしょうか」と言った．薮君といって秀才だった．

この教室で学んだ人々は，「江本会」を結成した．既に中外商業の卒業生も江本会を作っていたという．

17　逝去

筆者は，江本が横専教授の頃一度すれ違っている．高師英語会代表といった恰好でＹ専（市立横浜商業専門学校）へ出掛けたことがある．Ｙ専英語会の諸氏の間にはさまって着席していた覚えがあるが，どういう会合であったかよく覚えていない．ただ覚えているのは，期待していた江本教授が現れなくて，マシンガン演説が聴けなかったことである．代って現れた先生の英語は極くスローであった．

そこで，筆者の一面識（§１）は昭和38年の，寺西先生全快祝兼出版祝の日まで20年も日延べされることになる．寺西はその日の挨拶において，「これで精神的病気は癒りましたが，肉体的病気はまだ癒りません．これはもう癒らないと思います」と述べて，折角の祝賀会を少々暗くした．筆者は，前述の寺西の「必勝の信念」を思った．寺西は敬虔な旧教の信者であった．何年かのちに小金井の病院で生涯を閉じるが，その直前に岡寿吉（故人）が会っている．江本も大病を経験するが立直る．

江本は昭和41年１月29日朝，惜しまれつつ波瀾に満ちた77歳の生涯を閉じた．田久保は，江本の三十五日忌にあたって議を起し，同窓同級の友人に呼びかけた．四十九日は彼岸の入りであった．多聞院達意日茂居士の霊前には多額の香料が捧げられた．

後　記

江本茂夫の生涯を手短かに辿るつもりが，方々で脱線して終った．§１の中身のうち訂正すべき点もかなり残った．書き加えたいと思うこともあったが果さなかった．いわゆる教職追放解除ということも，当時としては面倒なことで，ここでも教え子たちの尽力があった．江本自身の嘆願書はおもしろい．軍事裁判のこと，特に教職追放とその解除については，明星大学の山本礼子氏にご教示を仰ごうと勝手に決めたものの，お願いするまでに至らなかった．裁判については全く不十分であり，教職追放には触れる余裕がなかった．その代りというのもおかしいが「江本英語」という一章を設けて，江本が編纂した教科書の英語，特に，テープから音声面を考察してみたかった（いらざることだ，ペーパー音声学者のすることだと一部の方に叱られようが）．

大阪万博のギリシャ館代表が戦争裁判のときの検事で，エモトを訪ねた話もいい話であるが詳しく触れる暇がなかった．与えられた紙幅はとうにオーバーしている．そこで注も29までで打切らせていただく．

次に§１についてなお言い残した点をあげておく．

1　「英仏にドイツ語が加わっていた」は，あまりに漠としているが，江本は士官学校で英語とドイツ語を学んでいる．「江本教官は英仏語はできるがドイツ語ができないようだ」という者のあるのをきいて奮起した，というのは江本進の証言である．

2　米軍の憲兵司令官はフェリン（Ferrin）准将である．

3　牟田口が江本に遺書を渡したというのも，江本進から聞いたことであるが，見当らないようである．牟田口は「盧構橋事件の原因」を書いて江本に渡した．その江本訳が原文と共に残されているのはおもしろい．占領軍の命令によるものか．これは永山によって齎らされた．

注

1　稲村松雄に従えば，江本は幼年学校から士官学校へ進んだという．しかし自筆履歴書はそれも語らない．（吉成正寿は，後年の陸幼とは制度も違うから，有り得ることであるとする）稲村が「教科書中心昭和英語教育史」で語るエピソード（出来の伝えるところ）は楽しいが，割愛する．

2　田久保浩平編「恩師江本茂夫先生」p.20「恩師江本茂夫先生」を以下「恩師」と略称する．

3　同p.22

4　同

5　永山政三郎「続不世出の英語教育者－語学，そして武士道－（「偕行」昭和62年12月号）」

6　「恩師」（p.32）

7　江本の自筆履歴書（昭和22年３月付）奇数ページに掲載．

8　筆者の師故藤井一五郎からきいた話．藤井も英語の達人であり江本を識る１人であった．

9　「恩師」p.44

10　西村稠「英語界の三大不思議附・真のWonder」（語学教育研究所編「随筆集『日本人と外国語』」開拓社昭和41年）

11　「英語の先生昔と今」p.36

12　「恩師」p.112から引いた．

13　寺西武夫「英語教師の手記」（吾妻書房昭和38年）p.53に詳しい．要望書は，結城豊太郎中外商業学校理事（興業銀行総裁）発宇垣一成陸軍大臣宛．

14　砲工学校では事情が異る．同校の学生は少，中尉（永山・吉成）．

15　The Bulletin No.85

16　「恩師」p.50

17　同p.51

18　永山によれば（筆者は未見），戦後編纂された東経大の歴史においては，配属将校江本中佐を評価していないというが，見事な価値観の転換である．

19　江本の薫陶を受けて横専卒，税務官吏として活躍，税務大学校教官（法人税担当）等を歴任．「随想」を著し，「江本教授のガイダンス」に最多ページを割く．「六つとせ無理な注文コンテスト　江本教授のガイダンス」に江本の厳格な教授ぶりとそれに辟易しながらも江本を慕う学生の気持の一端をうかがわせる他，その頃の自らのスピーチの例をも載せ，…I am but a pale moon reflecting the effulgent glory of my brilliant Prof. Emoto,…と，正に江本英語の光を伝えている．

20　自筆履歴書による．「確得」はママ．

21　「恩師」P.81

22　「随想」P.64

23　出来成訓「横浜専門学校の英語教育」（「日本英語教育史研究第6号」）P.166以降に詳しく，P.176には稲村松雄から引いている．

24　「英語の先生」P.33

25　戦後ルイス・ブッシュの「おかわいそうに」が出て，再び人々の話題になった．秋山は府中市に健在と聞く．

26　「オズワルド・ワインド氏の『ニッポン』第4回函館俘虜収容所長江本茂夫」（雑誌「歴史街道」平成2年12月号）（柏葉）

27　同

28　「星条旗（スターズ・アンド・ストライプス）紙（昭和21年11月3日）の記事を伝える陸軍罫紙に和文タイプ印書の書類が世相を語っている．

29　Chicago 6 Illinoisにおいて8 February 1946;主題はIn the matter of consideration and fairness shown to American personnel by Lt. Colonel Emoto, Japanese Officer in charge of Prisoner of War Camps on Hokkaido Island, Japan 最後にPrepared by Charles A. Lewis Captain, O-371313, Foreign Branch, ID S&I 6SCとある．

お礼と参照文献

一部重複を顧みず情報を頂戴したお礼と参照文献をあげる．敬称は略させていただく．本文中でつかった略語の類はここでもつかわせていただく．

江本とよ・江本進　極めて貴重な資料を大量に保存，今回もその閲覧を許された．

田久保浩平　昭和16年以来江本の指導をうけて英語力の獲得に精進，昭和47年ＮＥＣ語学研究所長．ＮＥＣを退いて神奈川大で教えるようになった今も，屡々アメリカに出張，日米政財界のトップ級の会議に通訳をつとめる．「恩師」は江本研究のバイブルであるが，他にも膨大な資料の閲覧を許された．

柏葉稔　本文中に，あるいは特に注19の中に述べたほかにも多くの情報を頂戴した．江本の高弟のひとり．

永山政三郎　陸士54期生，元大尉．陸上自衛隊調査学校で英語教官を勤めるうち，軍人として英語教師として特に国際感覚にすぐれた軍人としての先輩江本中佐に傾倒し，「偕行」に「不世出の英語教育者－語学，そして武士道－」並にその続編を執筆した．

吉成正寿　同じく陸士54期生，元陸軍大尉．開隆堂出版株式会社元取締役．旧軍の事情に精通，また*Jack and Betty*の編集を指揮して英語教育に貢献した経歴からも，江本を語るにふさわしい．戦後英語教育界の生字引のひとりでもある．

寺西武夫　「英語教師の手記」　吾妻書房　昭和38年

高梨健吉　「英語の先生，昔と今－その情熱の先駆者たち」　日本図書ライブ　昭和60年

出来成訓　「横浜専門学校の英語教育」　日本英語教育史研究第6号　日本英語教育史学会　平成3年

野崎貞子　英文校閲をお願いした．

田久保の「恩師」，語研のthe Bulletin等々は本文・注に譲る．「日本人と外国語」についても本文を参照願いたい．稲村松雄の著書についても同様．

（補注）§7に「（高等師範の）織田教授」が出るが「小田教授」の誤記ではあるまいかという．伊村元道によれば「小田千秋氏は大正7年高師，昭和7年文理大卒，高師教授，昭和16年死去」．新任早々の小田も教生指導

教官のひとりに加っていたのであろう.　　のテープにより故中佐を偲んでいただきたい.

テープのこと　江本進並びに高倉忠博（NHK）提供

Summary

After his six years' service at the Infantry 70th Regiment in Sasayama, following his graduation from the Military Academy, young Second Lieutenant Shigeo Emoto received an order to study English at the Tokyo School of Foreign Languages. Completing his one-year study cum laudi in 1919, Emoto got a new order. It says, "Stay in Hongkong and make further study in English."

In the same year, Emoto, being an able language officer now, was dispatched to Tien-tsin. He contributed much to the liason between the foreign settlements or gaikoku-sokai that existed in China in those days. He began French there and came to have a complete command of the language in a year!

Captain Emoto was called back to Japan in 1924, and was appointed a military trainer or haizoku shôkô at the Chûgai Commercial School near Amagasaki. Emoto's hard training made the Chûgai boys "best in Japan only with the lapse of two or three years"—Emoto's voice on the tape says. Yes, the Chûgai Commercial came to be widely known as the model school in military training. Emoto-sensei was somewhat different from other haizoku shôkôs, however. He soon began giving English lessons after the regular lessons were over. The boys were very much surprised to know that their severe military trainer was an excellent teacher of English as well. They were also surprised at his severe training in English teaching. It was reported that many of the Chûgai graduates were grateful of Emoto for his English teaching, which was of great help to them after entering the business world.

After teaching two years at the Military Academy, Emoto, who was a great success as a military trainer at the Chûgai Shôgyô, received a new order from the War Office to serve as one in the Ôkura Commercial College or Ôkura Kôshô, now the Tokyo Keizai University. He was there for two years, 1933—1935, giving brilliant results.

In 1935, Emoto was promoted to a leutenant colonel, and was placed on the reserve list.

Reserved Lt. Colonel Emoto was called from the Yokohama Semmon College, now Kanagawa University. He was appointed the head professor of the English Department. For the following five years and six months, he devoted himself to the teaching of English to Yokosen students, night and day, in the exact sense of the word. He taught his regular classes, of course, and after that he taught three and a half hours more every day giving extra lessons. During the vacations—spring, summer, and autumn—he taught approximately six hours every day since 8:00 a.m. Besides, he invited some volunteer students to his home in the evening. Thus, Emoto made a great contribution to the teaching of English at the Yokosen, backed by Yoshimori Yoneda, founder and president of the college.

With the outbreak of the war, Emoto was called to active duty. His first post was the commanding officer of the Shinagawa Railway Station, which was an important station where army troops started for the front. Emoto's duty was to superintend this transportation of the soldiers. He ordered the young officers in his command to teach English to the soldiers when there was no train at the station. The commander himself gave the tests. When the results were rather poor, he punished the officers. The young officers were happy to be punished, however, because the penalty was to go to the Nihon Gekijô theater and enjoy some foreign films, especially American films before their import was banned. The last film was, if my memory is correct, "Mr. Smith Goes to Washington." American people were our enemy. The war became more and more violent.

Two years later, Emoto was assigned to the post of commandant of the Hakodate POW camp. He had been worried about Japanese treatment of POW's. He was well versed in international laws in time of war, and had a good command of English, French, and German.

It is only natural that the authorities ordered him to go to Hakodate.

It is no exaggeration to say that in those days there was a tendency among the Japanese war-time leaders to encourage the unkind treatment of POW's as a means of provoking hostility against the enemy nations. Emoto's predecessor was rather cruel to the prisoners. It is no wonder that Emoto, who fair treated them according to the war-time international law concerning POW's, was welcomed by them. Emoto tried to listen to them in three languages. One of the prisoners described him as "just, impartial, and humane."

Emoto was not welcomed by the army authorities, however. On the contrary,there were some people, even among his subordinates, who came to suspect this commander to be too kind. "He might be pro-ally."

Emoto was dismissed. He was relegated to the Bibai coal mine. His military grade, his knowledge of foreign languages, his profound learning of laws...everything was of no use for his new job—"the superintendent of the coal mine workers (rômu-kantoku).

On August 15, 1945, the war came to an end. There was a trouble brewing at the Hakodate POW camp. No one but Emoto could calm it down. The authorities gave an order to Emoto to go back to Hakodate. Emoto hurried to Hakodate. It took him much time because of the hazardous condition of traffic. A Young American officer was waiting for him at the gate. He had been there for three hours! Snow lay on his overseas cap. Emoto had a difficulty in finding a car. He found one at last and loaded it with bottles of beer.

"Bottoms up!" Emoto did not forget to drink to the Allies' victory. Then he made a short speech. It was about the cause of the war, America's responsibility, Japan's responsibility, the future of Japan, the future of the world, etc. in his rapid English (machine-gun English, people called it) but showing admirable presence all the time. He asked POW's to stay where they were for some time. The camp was quiet again. It was all due to Emoto!

The Occupation Forces authorities summoned Emoto to appear before the court. He explained in his machine-gun English how fairly he treated the POW's, that there was no fault in the management of the Hakodate camp, etc.

The chief judge of the Yokohama Military Court said to the witness Emoto, "your English is perfect. But please speak a little more slowly so that the interpreter could understand you."

Emoto was not guilty at all.

Emoto opened an English class near Shinjuku. It was a small night class. His son Susumu and his pupil Takubo were among the students. One night, two American GI's came into the class. "What is it that you want, gentlemen?" The soldiers told Emoto that the Headquarters had got a letter telling that the teacher of this class was critical of SCAP's occupation policy. Emoto's rapid machine-gun English fired again. His explanation was persuasive enough. "Do you understand? Go back to your boss. Good night."

Lt. Colonel Shigeo Emoto passed away on January 29, 1966, at the age of 77.